

平成 23 年度活動報告

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
高田 明

1. 自分自身の研究テーマについて

南部アフリカの狩猟採集民として知られるサン(ブッシュマン)をおもな対象として、次の 4 つの領域において研究を進めてきた。(1)養育者－子ども間相互行為、(2)生業や人口構造と養育者－子ども間相互行為との関わり、(3)環境認識、(4)エスニシティの変遷。さらに、これらの研究を関連づけて、サンの社会的相互行為を組織化する文化的構造を明らかにしようとしている。平成 23 年度の派遣目的は、こうした研究に関してさらなる資料の収集・分析を進めるとともに、総合的コミュニケーション研究という観点から上記の研究の理論的な深化をはかることである。

2. 派遣の内容

(1)米国・オーストリア派遣（平成 23 年 4 月 9 日～9 月 30 日）

本務校のサバティカル制度を活用して、平成 23 年 4 月 9 日から 9 月 30 日にかけて、おもに米国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)言語・相互行為・文化研究センター(CLIC)に滞在して研究活動を行った。またこの間、6 月 25 日から 26 日は日本、7 月 10 日から 14 日はオーストリアで研究資料の整理、国際シンポジウムでの発表を行った。

CLIC では、前年度に引き続き同センターの客員研究員として所属し、“Linguistic anthropological study of responsibility formation in early caregiver-child interactions”という課題について共同研究を行った。具体的には、CLIC を構成する教員らが開催する各種のセミナーに継続的に参加し、自身の研究発表も 3 回行った。また平成 23 年 7 月からは、CLIC に所属する大学院生や他の客員研究員の有志で総合的コミュニケーション研究に関する研究会をほぼ週一回のペースで開催し、参加者が持ち回りで自分のデータを提示してその検討会を行った。さらに UCLA が所蔵する豊富な文献を活用した研究資料の収集、さらにロサンゼルス在住の日系家族を対象とした養育者－子ども間相互行為に関するデータ収集も継続的に行った。

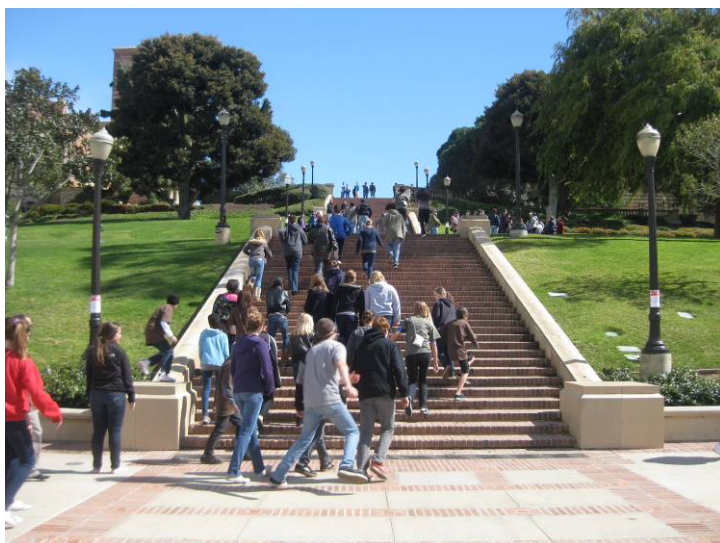


写真1 UCLA キャンパス

日本では、米国で収集した研究資料、日本で研究協力者が進めている共同研究の研究資料（いずれも、おもに養育者－子ども間相互行為に関する動画データ）の収集・整理状況を確認するとともに、動画データの受け渡しとバックアップの作成を行った。また関西大学で開催された国際シンポジウム“Reconsidering “communicative competence”: Findings and suggestions from fieldwork/empirical research”に参加し、“Sensing action sediments: Some features of directive sequences in Japanese caregiver-child interactions”というタイトルで発表を行った。

オーストリアでは、Haus Bergkranz(フランクフルト大学セミナーハウス)で開催された国際シンポジウム“The hunter-gatherer legacy of Khoisan-speaking peoples: in memory of Hans den Besten (1948-2010)”に参加し、“Surname and inter-ethnic relationships of the Ekoka !Xun”というタイトルで発表を行った。この国際シンポジウムは世界各地のコイサン諸語やその文化の研究者が一堂に集い、5 日間にわたってコイサン研究にしばった深い議論を繰り広げるために定期的に行われているもので、報告者は3 度目の参加となる。これにより、最新のコイサン研究の動向における自分の研究の位置づけを確認し、関心を共有する研究者から有益な示唆を得ることができた。



写真 2 国際シンポジウム“The hunter-gatherer legacy of Khoisan-speaking peoples: in memory of Hans den Besten (1948-2010)”での研究発表

上記の研究活動は、いずれも報告者の本務校でのサバティカルおよびその後の休暇中に行われた。サバティカルが制度化されているとはいえ、上記のような海外の研究機関での長期滞在は、同僚や指導院生の理解と協力なしにはなし得ない。ここに記して心からの謝意を表したい。また email や IP 電話などの通信手段を活用することにより、海外滞在中も急な用務に迅速に対応することや微に細にわたる学生指導を行うことができたと思う。教育・研究上におけるこうした通信手段の有効性を再認識した次第である。

(2)ボツワナ派遣（平成 23 年 11 月 14 日～24 日）

平成 23 年 11 月 14 日から 24 日にかけて、ボツワナ大学ハボローネキャンパスおよび同大学マウンキャンパスで、それぞれ総合的コミュニケーション研究に関する Herman Batibo 博士らとの研究打ち合わせおよび資料収集，人間－環境研究に関する Cornelis Vanderpost 博士らとの研究打ち合わせおよび資料収集を行った。Herman Batibo 博士の専門はアフリカ諸言語の言語学で、報告者が専門とするコイサン諸語に関する調査・研究の最近の動向やその研究史における位置づけ、今後の研究協力について有益な議論を交わすことができた。Cornelis Vanderpost 博士の専門は地理学であり、博士が所属するボツワナ大学マウンキャンパスには、自然地理学、人文地理学、生態学、植物分類学などの専門家が集まって自然科学的な大規模なラボを構えている。博士らとの議論により、カラハリ砂漠の自然環境の特色と報告者が研究対象とするサン（グイ、ガナ、クンなど）の生活様式の関連に関する研究について、同キャンパスで進めている GIS や Vanderpost 博士らがこれまでに蓄積した植物分類に関する広域データを使って研究協力を進めていくための見通しを得た。



写真 3 ボツワナ大学ハボローネキャンパス

(3)ボツワナ・米国派遣（平成 24 年 2 月 13 日～3 月 8 日）

平成 24 年 2 月 13 日から 3 月 8 日にかけて、ボツワナのニューカデ村でのフィールド調査、ボツワナ大学ハボローネキャンパスでの総合的コミュニケーション研究に関する Herman Batibo 博士らとの研究打ち合わせおよび資料収集等を行った。またこの間、2 月 21 日から 25 日は米国で研究打ち合わせおよび国際シンポジウムでの発表を行った。

ニューカデ村は、報告者が博士研究以来約 15 年間にわたって関わりを続けているフィールドである。今回の調査では、当該地域で活動する NGO、政府、国際機関の実務家らとも今後の協働に向けた意見の交換を行うことができた。



写真 4 ニューカデ村でのフィールド調査の光景

Herman Batibo 博士らとは、ボツワナ国内での最新の調査・研究動向や今後の研究協力についてさらに具体的な話を進めることができた。平成 25 年 3 月に頭脳循環プロジェクトで開催することを企画中の国際シンポジウムで Herman Batibo 博士を日本に招聘する交渉を行い、快諾を得た。

米国では、ラスベガスのリビエラホテルで開催された国際シンポジウム“Social learning and gender relations in hunter-gatherer childhood”に参加し、“Shaping intimate relationships: developmental transition in caregiving activities for young children among the !Xun of north-central Namibia”というタイトルで発表を行った。このシンポジウムでは、パネリストが南部アフリカのサン、西・中央アフリカのピグミー、オーストラリアのアボリジニなど世界各地の狩猟採集民の社会化や教育・学習についてのフィールド・データを紹介するとともに、より広い視野から狩猟採集民の社会化や教育・学習について比較考察を進めていくための見通しを得ることができた。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

CLIC で長期にわたって滞在する中で、授業やセミナーなどカリキュラムに位置づけられた研究活動を超えて、たくさんの研究者とさらに深い研究上の交流を行うことができた。中でも CLIC での報告者の受け入れ研究者を務めてくれた Charles Goodwin 博士とそのパートナーで自身も CLIC に所属する優れた研究者である Marjorie H. Goodwin 博士とは、毎週末に近くの山に早朝ハイキングに出向き、その後は夫妻が知人たちと開催している朝食会に参加することが恒例となった。このハイキングと朝食会では、研究者

だけではなく弁護士や音楽家、映画産業関係者などと知己を得て、専門家だけの議論では得られないような新鮮で活発な意見交換を行うことができた。

また報告者らを中心とする有志で開催することにした総合的コミュニケーション研究に関する研究会では、上記とは逆に、コミュニケーション研究上の関心を共有し、それぞれが関連する論文の執筆を進めている研究者が、正式なセミナー等では報告しにくいような **work-in-progress** のアイデアや研究上直面している困難などについて議論することができた。

オーストリアで開催された国際シンポジウムでは、世界各地で活躍するコイサン研究の若手から重鎮がアルプスの風光明媚な土地に設けられたフランクフルト大学のセミナーハウスに一同に集い、寝食をともにしながら他の研究集会では決して得られないコイサン研究の高度に専門的な議論を日夜繰り広げた。研究の歴史がその場で作られていく感覚を受けた。

ボツワナでは、報告者が博士研究以来約 15 年間にわたって現地調査を続けてきたニューカデ村を訪問した。ニューカデ村は、1997 年（平成 9 年）にボツワナ政府の政策によってサンの開発振興のために設けられた村であり、その設立の経緯やその後の住人と各種組織間のやりとりをめぐってはさまざまな議論がある。今回の滞在ではニューカデ移住直後に生まれた子どもたち（報告者が「赤ちゃん」研究のために参与観察していた子どもたち）が青年となり、村の運営をはじめとする各種の社会活動に活発に携わるようになっていた。感慨深い。

4. 目的の達成度や反省点

CLIC では、Charles Goodwin 博士が不定期で開催していた"Discourse-lab seminar"および Elinor Ochs 博士、Alessandro Duranti 博士、Charles Goodwin 博士、Marjorie H. Goodwin 博士らが中心となった毎週開催していた"Ling-Lab Seminar"を軸に正規のカリキュラムに参加した。両セミナーでは、報告者自身の研究についても複数回にわたって発表を行った。また正規のカリキュラムが減少する夏期には、有志で企画・開催した総合的コミュニケーションに関する研究会を軸として、各自がデータを持ち寄って研究に関する議論を行った。これらによって、前年度に設けた課題や目標（活動の焦点を絞ってそこに深く関わっていくこと）はほぼ達成し得たと自負している。

ボツワナでは、報告者を含む日本のサン研究者で執筆・編集した“The Encyclopedia of the |Gui and ||Gana Culture and Society”や報告者の英文論文を持って、現地で活動する NGO、政府、国際機関、ニューカデ村などを積極的に訪問した。これによって前年度に課題としてあげていた、さまざまな機関や個人との社会的ネットワークを拡げることができた。

またボツワナでは、報告者の知己でもあるニューカデ村出身の活動家が 2010 年（平成 22 年）に出版した著書“Tears for my land”を入手した。これはグイ（報告者が調査を

続けてきたサンの 1 グループ) 自身の手による世界初の著作で、今後の研究活動や現地の各種組織との協業を進めていくために極めて重要な研究資料となると考えられる。滞在期間が短かったため、著者本人との会談を行うことはできなかったが、これは今後の派遣でぜひ実現したい。

5. 平成 24 年度の派遣における課題と目標

平成 24 年度は、ボツワナでのコラボレーション調査、アウトプット研修をさらに推進することを予定している。平成 23 年度に訪問した NGO、政府、国際機関、調査地などとの関係をさらに強化し、さらにこれらの機関、個人の相互のリンクをはかっていくことが課題となるであろう。

また、本プロジェクトによる米国等への派遣で培った社会的なネットワークをさらに強化するとともに、その研究活動の成果を世界に向けて発信していくことも重要な課題である。そのために、平成 24 年度には報告者の研究に関連する国際学会や国際シンポジウムに積極的に参加し、研究発表を行いたい。

さらに平成 25 年 3 月には、本プロジェクトの最終成果の 1 つとして、本プロジェクトで派遣された若手研究者が中心となって京都で国際シンポジウムを企画・開催することを予定している。すでに Herman Batibo 博士にはこのシンポジウムのための招聘についての快諾を得たが、平成 24 年度にはさらに他の若手研究者とも密接に連携しながら、国際シンポジウムが有益かつ盛況なものになるための試行錯誤を行っていくことが求められるであろう。